

同居・交流の参考（国内実例より）

Q1 共同生活のルールはありますか？

A1 決まったルールはありません。生活リズムが異なることを前提に話し合いでルールを決めます。

（例）・政治と宗教の話はしない

- ・スケジュールはメモで共有
- ・平日の朝食を一緒に食べる



Q2 トラブルは起きませんか？

起きた場合、どのように解決していますか？

A2 トラブルは、マッチング事業者が行うアフターケアにより未然に防げる場合もあります。また、トラブルのほとんどは二人で解決しています。

加えて、両者の家族の理解を得ておくことも重要です。



Q3 この住まい方の感想は？

A3 一人暮らしより自由度は減るが、得るもののほうが多い。夜9時くらいまで一緒にTVを見ることもあれば、一緒に出かけることもある。また、同居が終わったあとも交流は続いています。



費用や同居のルール（高齢者宅の状況や事業者等により異なります。）

- ①若者から高齢者へ支払う居住費負担
- ②同居時のルール
- ③事業者を支払うマッチングやアフターケア等に係る費用

気軽にお問い合わせください

主な事業者 マッチング事業者	(株)応用芸術研究所(京都市)	TEL 050-1276-1376
	(株)あかり(京都市)	TEL 075-707-1616 E-mail akari.project0@gmail.com
	NPO 法人フリーダム(京都市)	TEL 075-241-0110
	(株)Localize[ローカライズ](福知山市)	E-mail shoda@localize.co.jp

発行 京都府建設交通部住宅政策課

住所 〒602-8570 京都市上京区下立売通新町西入

TEL 075-414-5358 E-mail jutaku@pref.kyoto.lg.jp

FAX 075-414-5359 HP(URL) <http://www.pref.kyoto.jp/jutaku/>

このチラシは、国内実例として NPO 法人ハートウォーミング・ハウス、東京リトルプレイス、NPO 法人街 ing 本郷、NPO 法人リブ&リブ（以上東京都）、福井大学工学研究科 菊地吉信准教授の協力を得て作成しています。

平成 30 年 7 月発行

令和 7 年 9 月更新

アクティブシニア
のみなさまへ

次世代下宿「京都ソリデール」事業

高齢者宅の空き室に低廉な負担で若者が同居・交流する次世代下宿

※ソリデール：フランス語で「連帯の」という意味

家族じゃないけど同居して

「ただいまぁ〜」「おかえりい♪」

「今日なにしたん?」「あんなぁ…」

懐かしくて新しい住まい方をご提案



 京都府

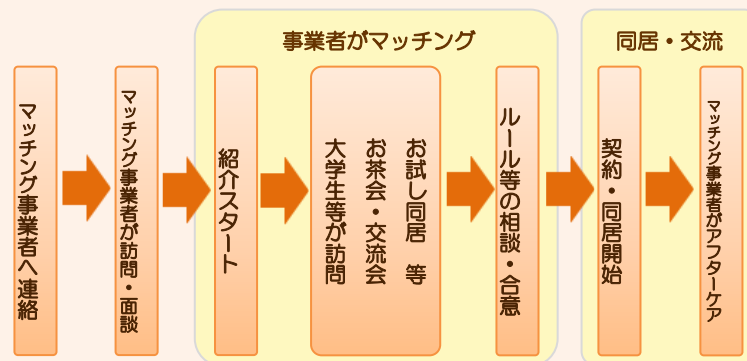
次世代下宿「京都ソリデール」事業とは

高齢者が自宅（借家を除く）の空き室を大学生等へ低廉な居住費負担（家賃等）提供し、同居・交流する住まい方です。

●以前は京都でも多く見られた「下宿」のように、朝夕のあいさつや、リビングでともに時間を過ごしたり、共通の趣味を楽しんだり、地蔵盆など地域のイベントに一緒に参加したり、大学生と高齢者や地域との交流を大切にしたい住まい方です。

●「下宿」との違いは、双方の合意までに交流会や訪問などを実施すること（お試し同居をすることも）、同居のルールを決めること（変更も可）、高齢者が収益を目的としないこと、食事の提供は無くても良い（提供も可）などです。

手続き等の流れ(例)



お茶会・交流会のようす

同居・交流する住まい方はさまざまです

それぞれが無理のない形で同居・交流をしておられます。

東京都の事例

お互いにほどよいと感じる距離感で交流し、地域活動と一緒に参加する事例（OさんとH君）

生活のリズムが異なるので、朝夕のあいさつはなく、食事はそれぞれ別が基本スタイルとしています。Oさんは、町内会長用務やコミュニティカフェ運営などに、朝方出かけて夕方帰宅することが多い方。「以前、自宅で倒れたときに同居していた大学生が救急車を呼んでくれて助かった」、「一人暮らしより安心感がある」、「ちょっとしたお願いができる」などを経験して、新たに大学生を受け入れたリピーターです。



以前同居・交流のS君（左）

同居するH君は近くの大学院に通う京都出身者で、朝はゆっくり家を出て夜まで研究しているので、晩御飯は学食で食べて帰宅することが多い。「家賃が安い」「時々もらう料理（カフェの残り）」などはありがたいとのこと。Oさんの誕生日やご子息の帰省の際には「一緒に夕食をいただく」こともあったり、月1回の古紙回収や餅つき大会などの「地域との交流も良い経験」となるとのこと。



同居・交流中のH君(左)、Oさん(右)

京都府の事例

夫婦の家事のついでが学生の手助けとなり、学生の活動との相乗効果も期待される事例（Mさん夫婦とO君）

「夕食は夫婦の分のついでにO君の分も作る（時間が合えば一緒に食べる）。洗濯も夫婦の分のついでにO君の分もする。何か特別なことをするのではなく、普段の家事のついでが学生の手助けになってうれしい」とお話をいただいたMさんは、ご自宅を歌声喫茶や健康麻雀教室に提供するなど高齢者のふれあい活動を実践。O君には「高いところの調理器具を取ってもらったり」「高齢者のふれあい活動に関わってもらったり」ありがたいとのこと。さらに「O君のような学生を、もう一人受け入れたい」との希望も。



同居・交流中のO君(左)、Mさん(右)

同居するO君は左京区松ヶ崎の大学に通う奈良県出身者で、学生団体に所属し京都北部の地域の活性化の中心メンバーとし活動。以前は奈良の実家から通学し、往復3時間を費やしていたが「ゆっくり朝ご飯が食べられる」ようになり、「最初の頃は、家事の手伝いも受け身だったがだんだん雰囲気はわかってきて、気付いたことを進んで動けるようになった」とのことです。



一緒に鍋を囲むO君とMさん夫妻